F-6

現代日本語における「トイウカ」のメタ言語用法

東京大学大学院　総合文化研究科言語情報科学専攻　川北麻由
e-mail: kawakita-mayu429@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

要旨
本発表では、現代日本語における「というか」「てか」「つーか」「つか」(以下ではまとめて「トイウカ」とする)の機能を利用したような用法(本発表ではメタ言語用法と呼ぶ)について、実際の会話例およびCMC(Computer Mediated Communication)のデータをもとに考察する。本発表では、「トイウカ」には①発話修整、②暫定表示、③文脈調整の三つの機能があると主張したうえで、これらを逆手にとって用いる例が実際のデータにおいてみられることを指摘し、その用法について考察する。また、このような用法によって、自然発話およびCMC上で、コミュニケーション上どのような問題が生じるかについての可能性も考察する。CMCという新たに台頭してきたコミュニケーションの形式において、自然発話でよく見られる「トイウカ」という言語形式がどのような役割を果たしているのかは、新たなコミュニケーション技術に対して我々がどのように向き合っているかを考察する上で重要であると考えられる。

1. はじめに

「トイウカ」は、「というか」「ていうか」「てか」「つーか」「つか」などの様々な形をとって、現代日本語において非常によく使われる言語形式である。本発表では、「トイウカ」が持つ機能を三つに分類し、それらの機能を利用しているような例を考察する。本稿は、「その言語形式がもつ機能を、話し手(および書き手)が、その機能が持つ効果を分かったうえで使用している用法」を、メタ言語な立場から「トイウカ」という言語形式を用いているという点で、本発表ではメタ言語用法と呼ぶ。用いるデータは、実際の会話例を集めた命題会話コーパスおよびCMC (特にTwitterというSNS)のデータをもとに考察する。以下では、「トイウカ」の先行研究について考察したのち、「トイウカ」が持つ機能を三つに分類したうえで、それぞれの機能を利用した用法を見ていく。

2. 先行研究

「トイウカ」に関する先行研究は数多く存在するが、「トイウカ」を包括的に考察したものには、以下の先行研究が挙げられる。まず、若者語としての「トイウカ」について述べたものに、沖(1999)がある。沖(1999)は、「AというかBというかC」という自分の発話を言い直すために使用されていたものが、相手の発話を言い直すためにも使用されるように変化していき、「ていうか」を使用することによって、言葉に表れた相手の表現をそのまま引き取るのでなく、言語表現を通して相手の真意を察し、さらに自分の主張や省略を重ねた言い方で表現できると分析している。このように、「ていうか」が、『相手の発話を直接的に否定するのではなく、相手の発話も間違ってはいないが、それよりももっとよい表現があると暗示する』という効果をもつ、という主張は、他の先行研究でも指摘されている点である。例えば、辻(1999)は、「とか」弁と並べて「っていうか」を扱っており、ぼかし表現／あいまい表現として考察している。これは、対人関係を緩衝するような機能を持ち、発話内容の不特定化と発話主体のメタ化(辻(1999)の言葉による)という二つの働きを行うという(辻, 1999)。辻(1999)によれば、「っていうか」で発話内容の不特定化を行うことで、話し手は発話内容に対する責任を軽減することができ、また、発話主体をメタ化することで、相手の言葉を真っ向から否定するのではなく、相手の言葉より適切なことばを提示するメタ言語評価者(辻(1999)の言葉による)の立場になれるという。

また、「トイウカ」が持つ機能を全体的にまとめたものに、Lauwereyns(2002)と原田(2015)がある。Lauwereyns(2002)は、世代間での「てゆーか」の使用の違いに注目し、「てゆーか」の機能を「訂正」「言い換え」「具体化」「ぼかし」「サブトピック変更」「補足説明」の六つに分類している。Lauwereyns(2002)によれば、年齢の高い日本語母語話者は、主に「てゆーか」を自己修復として用いることが多いのに対し、若者は「サブトピック変更」や「補足説明」としても用いるという。原田(2015)は、寺井(2000)の分析をもとに、「トイウカ」全体を「発話を修整する用法」と「何の脈絡もなく話題を転換する用法」にわけ、それぞれを〈発言改正用法〉〈話題調整用法〉と呼んでいる。さらに、〈発言改正用法〉を〈暫定提示〉〈言い換え〉〈譲歩補足〉の3用法に、〈話題調整用法〉を〈話題導入用法〉と〈話題維持〉の2用法に分けている。「トイウカ」にこれらの多くの機能／用法があることが指摘されている一方で、それらに共通する部分があると指摘しているのがLaury and Okamoto(2011)である。Laury and Okamoto(2011)は、「てゆーか」と英語の“I mean”が語用論的に似た働きをするとし、「てゆーか」の基本的な機能は、「先行発話が不十分であると感じる」という話し手の立場を表明するものであり、先行発話に対する何かしらの物足りなさを感じていると暗示するものであるという。さらに、Laury and Okamoto(2011)では、先行発話がたとえ明らかに不適切な内容であっても、「てゆーか」を用いて言い直すことで、直接的に先行発話が間違っているということを伝えるのではなく、「間違ってはいないが、不十分である」という間接的な修復を行うと主張されている。

「トイウカ」が、このように先行発話を言い直す働きを持つことについて、会話分析的な視点から考察し

た論文は数多く存在する。若松・細田（2003）では会話分析的視点から、「ていうか」を考察しているが、これは「ていうか」が予測可能性を持つという特徴があるとした上で、予測可能性に即した基本的な用法を〈修復マーカー〉とし、予測可能性を裏切る用法を〈転覆的用法〉としている。転覆的用法には、単に修復を行うのではなく、先行発話に関連した新たな話題を始めたり、また、全く関係のない話題を始めるものが含まれる。さらに、Rosenthal（2008）は、「ってゆうか」がリペアを開始する際に用いられることから、それらを会話のターンの側面から分類し、「ってゆうか」は主に自己開始・自己修復で用いられ、生起場所は同じターン・次のターンの最初の二つの場所で起こるという。また、次のターンの後にリペアが始まる、即ち他の会話参与者が新たなターンを始めた後にも「ってゆうか」でリペアを開始することは可能であるが、その場合、他の会話参与者がトラブル源となる発話をきちんと理解できていないことを暗示するという（Rosenthal, 2008）。また、Hayashi and Hosoda and Motimoto（2019）では、「ってゆーか」をリペアの前置き（Repair Preface）として扱い、基本的には同じ事柄を言及する二つの言い方をつなげる働きをし、「ってゆーか」に後続するほうが、より良いものとして（または話し手の意図に沿ったものとして）扱われていると指摘している。しかしその一方で、先行発話を切り捨てるわけではなく、先行発話に何かしらの不十分な点があるということを暗示する働きを果たすという（Hayashi and Hosoda and Morimoto 2019）。

また、「トイウカ」の持つメタ的な効果に関して、「トイウカ」という言語形式に用いられている引用の「ト」には、発話から一定の距離を置くという効果があるということが指摘されている（Suzuki 2007, マグロイン花岡 2007）。

3.「トイウカ」の持つ機能とメタ言語用法

以上のような先行研究では、「トイウカ」の機能や用法を細かく分類していたが、本発表では、「トイウカ」の機能を、その生起場所を基盤とした三つに集約し、連続体として捉えることを提案する。つまり、先行研究で「機能」や「用法」とされているものは、この三つの機能の派生として捉えることができ、また、三つの機能の連続体として捉えることで、どの用例か判別しにくい用例もこの枠組みの中に収めることができる。また、その三つの機能にはそれぞれその機能を理解したうえで利用するような用法が存在すると主張する。本稿におけるメタ言語用法や、CMC という新たな言語様態については、先行研究ではあまり触れられていない点であると考えられる。

まず、「トイウカ」の機能は、その生起場所を基にして三つの機能に集約できると主張する。即ち、①発話修整、②暫定表示、③文脈調整の三つである。Shinzato(2011)は、日本語の階層構造から文法化を考察し、発話の中に埋め込まれている言語形式が発話頭(左周辺部)に移動するにつれ主観性が強まり、発話末(右周辺部)に移動するにつれ関主観性が強まるとし、それぞれ機能が変化していくと考察した。現代日本語における「トイウカ」も、この枠組みで考えることができると思われる。即ち、右周辺部では、関主観性の強い②暫定表示、左周辺部では、主観性の強い③文脈調整という機能があると考えられる。発話中の機能は、「と」「いう」「か」という字義的意味が強い①発話修整とすることができる。必ずしもそれぞれの機能と位置は一致しないものの、実際のデータを見ると、やはり発話中では①発話修整、発話末では②暫定表示、発話頭では③文脈調整の用法が多い。

次に、この三つの機能についてより詳しくみていく。①の発話修整は、間違っている内容や、コミュニケーション上問題となる部分を正す」という意味を含め、「言い換え」「補足的な説明」など、「発話の内容を調整する」という機能である。②の暫定表示は、「P トイウカ Q」において、P の内容に不足点を感じつつも、Q が思いつかない／Q が P に替わる表現となってはいない、ということを示すというものである。③の文脈調整とは、談話の最中に用いられ、それまで進行していた談話の流れを変え、新たな流れを作り出すという機能である。さらに、これら三つの機能は、連続体をなしており、以下のような図 1 で表せると考える。図 1 において、関連度とは、先行文脈(発話)と後続発話との関連度、確信度は先行文脈に対する後続発話の確信度を表す。

このように、連続体として考えることによって、実際の会話例では、先行研究におけるどの機能に属するか判断しにくいものも、この枠組みの中に組み込めると考えられる。

次に、本発表で一番主張したい点は、これらの機能を理解したうえで用いる用法が「トイウカ」に存在するということである。即ち、「P トイウカ Q」という構文が持つ「P≦Q」というスキーマを理解したうえで、それを逆手にとって使用するということである。本発表では、「トイウカ」の機能を利用した用法を「メタ言語用法」と呼び、以下で、ノーマルな「トイウカ」の用法とメタ言語用法を比較して考察する。

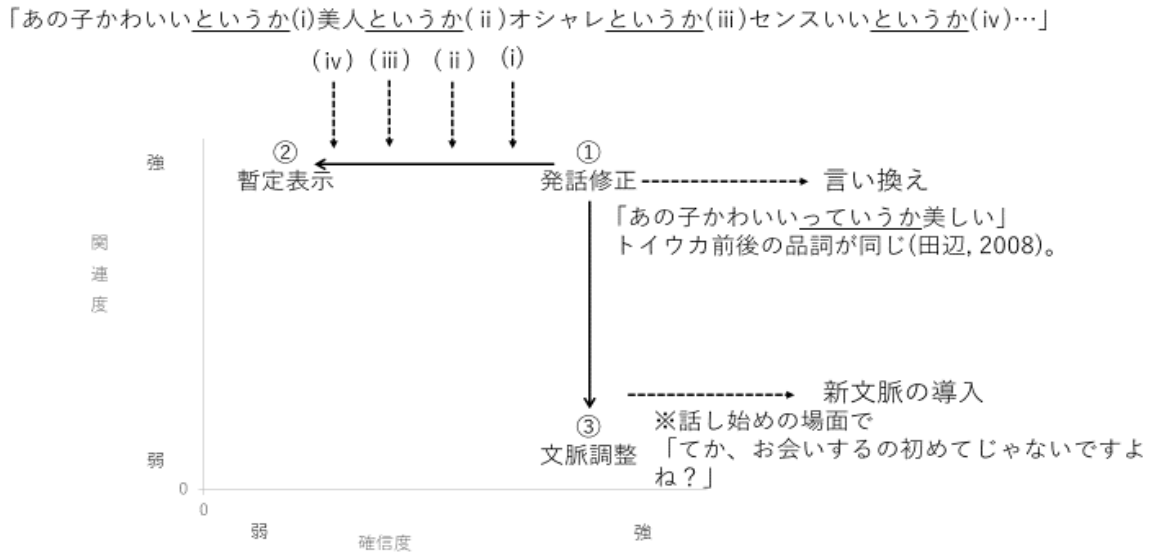

図 1

4.「トイウカ」のメタ言語用法

「トイウカ」のメタ言語用法は、上に挙げた三つの機能に対応する形で三つ存在する。まず、通常の①発話修整用法と、①発話修整をメタ言語に用いていると解釈可能な例を並べてみる。

(1)　①通常発話修整(名大会話コーパスより)

私の友だちでさあ、１人、あの何、すごい変わった子というか、おもしろい子がいてさあ、

(2)　①'メタ言語発話修整

(4 コマ漫画の会話、登場人物は言語学を学んでいる大学院生の男女二人。)

1 コマ目

頭を抱えて座る男

男：「う…頭が痛い…風邪か…？論文も頭に入らないし…何もしたくない…」

2 コマ目

女が男の様子が変であることに気付く

女：「あら、タブロー？」

3 コマ目

女：「だ、大丈夫…？なんか、有生性低いみたいだけど…」

4 コマ目

女：「「いる」っていうか「ある」って感じ？」

男：「らむだ…俺のアニマシーの低さに気付いてくれたのか…優しいな…」

(https://twitter.com/chikuwa_univ/status/1085912475587903489)

この例は、「P トイウカ Q」という構文が持つ「P≦Q」というスキーマを利用していると考えられる。ここでは、体の調子が悪いことを言語学徒らしく「有性性が低い」と表現する文脈であるが、日本語では、人間に対しては「ある」ではなく「いる」を使うことになっている。そのうえで、4 コマ目の女は、元気のない人間に対して「ある」を使うことを際立たせるために、「トイウカ」を用いて本来期待されている「いる」を打ち消して「ある」に直すという、修正を“あえて”してみせている。この、あえて修正を使うという所に、「P<Q」スキーマのメタ的使用が指摘できる。

即ち、「人間である男に対して、「いる」という表現が正しいとわかっているが、有生性があまり感じられないため、むしろ誤用であるはずの「ある」という表現こそ話し手はふさわしいと考えている」ということが解釈可能である。これは、①発話修整の機能を利用していると考えられる。あえて「トイウカ」で発話を修整することで、「P トイウカ Q」の「P」も話し手の頭の中にはあるが、話し手は意図的に「Q」を選択したということを表すことが可能である。

次に、通常の②暫定表示と、それをメタ言語に用いていると解釈可能な例を比較する。

(3)　②通常暫定表示(名大会話コーパスより)

(2 人受け持つ家庭教師のうち、)もう 1 人が大変すぎるから、楽に感じるというかなんか。

(4)　②‘メタ言語暫定表示

01　F074　：　私以前ちょっと一人暮らししてたときに、練馬に住んでたんで、（はーい）
02　　あの、池袋が、もよ、ま、最寄りというか、（最寄り、はい）一番近い、こ
03　　う、ショッピング（はい）スポットだったんですけど、そのときはやっぱり
04　　池袋は新宿よりもさらになんかこう、（うーん）なんていうかごちゃごちゃ
05　　してるというか。
06　F087　：　ごちゃごちゃしてますよねー。
07　F074→：　まー、住んでる人には申し訳ないけど品のない町というか。＜笑い＞

この例において、7 行目の F074 の発話における「トイウカ」は、②暫定表示の機能を利用していると解釈可能である。暫定表示機能において、②通常暫定表示は、「というか」で言葉探しをしているが、より適切な表現が見当たらないという場合に用いられているのに対し、②‘メタ言語暫定表示の場合は、「トイウカ」の持つ[P≦Q」というスキーマを利用し、「「品のない町」よりもふさわしい表現があるかどうかは分からないが、「というか」を用いることで話し手はよりふさわしい表現があると念頭に置いている」ということを聞き手に暗示することが可能である。つまり、話し手は「品のない町」という表現こそぴったりだと感じてはいるが、少々強い言葉のため、「というか」で修整可能であるとマークすることで、コミュニケーション上の衝突を回避しているともいえる。これは皮肉にも用いられる可能性がある。

最後に、通常の③文脈調整と、それがメタ言語に用いられているものを比較して考察する。

(5)　③通常文脈調整（筆者の収集したデータより）

(話し出しの場面で)というか、初対面じゃないですよね？

(6)　③‘メタ言語文脈調整(名大会話コーパスより)

(F107 と F023 が二人で行った海外旅行で警察が多かったと F023 について語っている場面。)

01　F128：　それやっぱアタックが始まったから？
02　F107：　というかね、あのね。
03　F023：　警戒がすごく。
04　F107：→ていうかね、テロがまずアメリカで起こってからは結構強かったんだけど、ま 05
た増員したみたいだもんで。

③通常文脈調整の場合、話し始めの場面であるため、話し手は聞き手に対し、「というか」で話を導入することで、「この発話場面で話す必要がある事柄」として「二人が初対面ではないこと」を伝えている。それに対し、③‘メタ言語文脈調整 4 行目に表れている「ていうか」の場合、通常の文脈調整とは異なり、「反論」及び「ターンの奪取」という働きをしていると考えられる。2 行目で F128 の発話に対し F107 が「というか」で修復しようとしたが、F107 の発話の途中で F023 が新たな発話を開始した為、4 行目で F107 が、海外で同じ場面を体験した F023 の発話に対し「反論」をし、自分が初めに話していた内容を続けるための「ターンの奪取」が行われている。これも、「P≦Q」のスキーマを利用し、F023 の発話より自身の発話のほうが正しいという「反論」、および F023 の発話より自分の発話のほうが重要であるという「ターンの奪取」というメタ言語な働きが現れている。

以上のような「トイウカ」のメタ言語用法を、図 1 に加えると、以下のようになる。

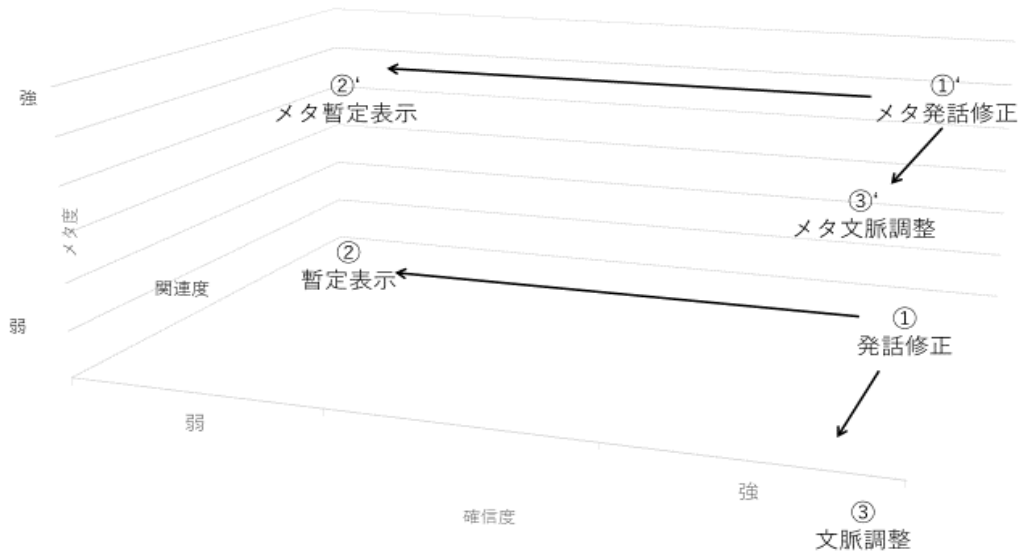

図 2

5. CMC における「トイウカ」

以上のような「トイウカ」のメタ言語機能は、話し言葉ではメタ言語機能が「解釈可能」に留まるのに対し、SNS などのような CMC の談話において顕著に現れやすい。なぜならば、「トイウカ」の元来の機能は、田辺(2008)の指摘するように、発話を修復し、言い換えるものであるため、「書き直し可能」である CMC では通常現れる必要のないものだからである。それにも関わらず「トイウカ」が用いられていることから、「トイウカ」をわざわざ用いることによるメタ言語機能があると考えられる。Twitter などの CMC などにも、「トイウカ」はよく見られる。上で述べたように、会話データよりも、CMC などで文字に起こされている談話のほうが、「トイウカ」のメタ言語性を感じ取りやすい。CMC という特徴として、書き直しや投稿前に推敲ができるという点では「書き言葉」だが、即時性／双方向性／プライベートのやり取りに多用されたりする、という点では「話し言葉」的でもあるという両面性が挙げられる。従って、このようなメタ言語用法が現れやすいのではないかと考えられる。

次の例は、①‘メタ言語発話修整の例である。

(7)　※ヨーダはある人気映画の登場人物で、大きな力の持ち主。
「ヨーダの威力が本立てに。ヨーダがフォースで本を支えるというかストップさせるブックエンド。かっこいい」
(https://twitter.com/wtbw/status/1128578314900332545)

この例は Twitter で見られた例であるが、ある人気映画の登場人物をモチーフにしたブックエンドについて書かれている。本来ブックエンドは本を「支える」ものであるが、書き手は「というか」を用いて、「支える」ではなく「ストップさせる」という表現を選ぶことで、そのデザイン性を際立たせていると考えられる。

②暫定表示のメタ言語用法は、ノーマルな用法である「ぼかす」という性質上 CMC では見えにくいが、次の例は、メタ言語用法と解釈可能な例である。

(8)　※「迅くん」「滅さん」は、番組の中の登場人物
「迅くん、滅さんの都合の悪い方向に自我が成長した途端リセットされて「良い子」に戻されるの、道具の在り方としては正しいのかもしれんけどこっちの感情としてふざけんじゃねぇというか」
(https://twitter.com/hikoukirabosi/status/1180669525873709056)

この例では、②暫定表示の「ぼかす」という性質を利用して用いていると解釈可能である。つまり、書き手は「ふざけんじゃねえ」という表現こそふさわしいと考えているが、「ふざけんじゃねえ」という言葉が少々強いため、「というか」を付加させることで和らげているということである。「正しいかもしれんけど」という譲歩があり、かつ「こっちの感情として」という前置きがあることも、利用用法として解釈可能にしている要因であると思われる。

さらに、次の例は③‘メタ言語文脈調整の例である。このような「トイウカ」が、「個人の呟き」であるはず

の Twitter で現れることは非常に興味深い。

(9)　※書き手は一般人
「あ、てかいつの間にか歩道狭めて車道拡げた？」
(https://twitter.com/R_468/status/1072678722149474306)

本来 Twitter とは、個々人が各々思ったことを徒然に書き連ねていくというものであり、芸能人などの公式なアカウントであれば、Twitter の場を「一対多数のコミュニケーションの場」と考えている場合もあると考えられるが、一般人の場合、多くは自分の「呟き」を単に発現する場であり、さらに文字で入力するものであることから書き直し可能であるため、この例のような「あ」や「てか」などで始まる談話は、本来ならば非常に奇異なものである。しかし、まるで実際の自然発話であるかのように、「トイウカ」で始まる Twitter 例は数多く見られる。つまり、「てか」の機能を利用して、「自分の書き込みは注目に値する(そのため、誰かからの反応を待っている)」と解釈することも可能である。
このような新たなコミュニケーションツールにおける「トイウカ」の使用には興味深い例が数多く見られる。

5. 結語

「トイウカ」のもつ機能を逆手にとって用いるようなメタ言語用法(特に②'メタ言語暫定表示と、③'メタ言語文脈調整)では、コミュニケーション上の問題を回避するような機能がある一方、用い方によっては、相手に不快感を与えるようなコミュニケーション上の問題を発生させかねない。
本発表では、以上のような「トイウカ」の機能を利用したようなメタ言語用法について、実際の会話例および CMC のデータをもとに考察する。さらに、このように、もともとの機能を利用しているような用法によって、コミュニケーション上どのような問題が生じるか、あるいはどのようなコミュニケーション上の問題を回避できるかについて考察する。特に、CMC のような新たに台頭してきたコミュニケーションツールと自然発話におけるコミュニケーションとの間に差異があるのかどうかも視野に入れる。

参照文献

沖裕子（1999）「質問 21　若い人が使う『ていうか』はどんな言葉ですか」『言語』28(5) : 80-83.
田辺和子（2008）.「「というか」 の文法化に伴う音韻的変化の一考察-縮約形「てか」「つか」 をめぐって」『明海日本語』(13) : 55-63.
辻大介（1999）「「とか」弁のコミュニケーション心理」『第 3 回社会言語科学会研究大会予稿集』19-24.
寺井妃呂美（2000）「談話における『トイウカ』の機能」 佐伯圭三教授古稀記念論文集編集委員会(編)『日本と中国ことばの梯　佐伯圭三教授古稀記念論文集』 東京:くろしお出版.
原田幸一（2015）「若年層の日常会話における 「トイウカ」 の使用: 縮約形 「てか・つか」 に注目して」『日本語の研究』11(3) : 16-31.
マグロイン花岡直美(2007)「文頭の「ていうか」とメタ言語否定」『言語学の諸相　赤塚紀子教授記念論文集』久野暲・牧野成一(編)167-176. 東京:くろしお出版.
若松美記子・細田由利（2003）「相互行為・文法・予測可能性　「ていうか」 の分析を例にして」『語用論研究』(5)： 31-43.
Hayashi, M., Hosoda, Y. and Morimoto, I (2019) *Tte yuu ka* as a repair preface in Japanese. *Research on Language and Social Interaction* 52(2)：104-123.
Lauwereyns, S (2002) Hedges in Japanese spoken discourse: A comparison between younger and older speakers. (Ph.D. dissertation). Michigan State University.
Laury, R and Okamoto, S (2011) Teyuka and I mean as pragmatic parentheticals in Japanese and English. *Subordination in Conversation: A Cross-linguistic Perspective. John Benjamins, Amsterdam*, 209-238.
Rosenthal, B. M (2008) A resource for repair in Japanese talk-in-interaction: The phrase tte yuu ka. *Research on Language and Social Interaction, 41*(2), 227-240.
Suzuki, R (2007) (Inter) subjectification in the quotative tte in Japanese conversation: Local change, utterance-ness and verb-ness. *Journal of Historical Pragmatics*, 8(2), 207-237.